

滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三におけるキリスト教
受容の文学的研究——「インマヌエル」「復活」
「再臨」を中心とした批評的考察

小林, 孝吉

<https://hdl.handle.net/2324/1959202>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (学術), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	小林 孝吉			
論文名	滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三におけるキリスト教受容の文学的研究 ——「インマヌエル」「復活」「再臨」を中心とした批評的考察			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	鏑木 政彦
	副査	九州大学	教授	波瀾 剛
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	九州大学	名誉教授	寺園 喜基
	副査	フェリス女学院大学	名誉教授	宮坂 覺

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本のキリスト教において、神学、文学、伝道という異なる領域で活躍した滝沢克己（1909～1984）、椎名麟三（1911～1973）、内村鑑三（1861～1930）の三人のキリスト者を取り上げ、その「回心（コンヴァージョン）」体験の独自性と意義を、批評的な考察を通じて比較、解明する文学的研究である。

第1部「滝沢克己—インマヌエルと存在の宇宙」は、滝沢の思想の核である「インマヌエル」を中心軸に、初期から後期に至る滝沢の哲学的神学を解明・論述する。第1章「存在—〈最初の滝沢〉をめぐって」は、西田哲学との出会いから西田によるカール・バルトの紹介を経て、西田の「絶対矛盾的自己同一」とバルトの「インマヌエル」とを同一なる生命の根源的事実の異なる表現として理解する〈最初の滝沢〉を描く。第2章「神」では、ドイツ留学（1933～1935）から日本にもどり戦中、戦後の日本の中で〈最初の滝沢〉がいかに時代と格闘しつつ、その思想を深化させていったのかを描く。バーゼル大学招聘以前、ナチスへの忠誠宣誓拒否によって停職を命じられる直前のバルトの講義を聞いた滝沢は、イエス・キリストのペルソナの問題（神にして人）を深く思考するとともに、ナチス政権下におけるドイツ教会闘争において反ナチスを鮮明に表明したバルトの「神学的実存」にふれる。日本に戻った滝沢は、バルトから指摘された「教会の壁と聖書の外における神認識の原理的可能性と事実的不可能性」の課題を、『西田哲学の根本問題』（1936）、『カール・バルト研究』（1941）において考察する。滝沢はインマヌエルを、イエス・キリストのペルソナそのものとして理解するとともに、そこに人間の自由の原点を見出したが、しかし滝沢にとってそれは教会の壁と聖書の外にも開かれたものであった。第3章「自由」は、教会の壁と聖書の外にある芥川龍之介と夏目漱石を滝沢がどのように読んだのかという切り口から、滝沢の思想をさらに究明し、第4章「滝沢克己の彼方へ—〈最後の滝沢〉の意味するもの」は、西田哲学とバルト神学を架橋しようとした〈最初の滝沢〉から、晩年、清明教の出会いを通じて「純粹神人学」を考察した〈最後の滝沢〉への展開を描き出す。滝沢のインマヌエルの神学は、イエスと聖書に導かれつつもそれに縛られない、インマヌエルの原事実にかかれるコンバージョンを通じた、神と人間との新たな関係を示したものと評価される。

第2部「椎名麟三—復活体験とキリスト教文学の誕生」は、椎名のコンバージョンの核である「復活」を中心軸に、その生い立ちから文学活動の展開を、特に椎名における「キリスト教文学」の誕生に焦点をあてて描き出す。第1章「椎名麟三の文学と希望」は複雑な生い立ち、非合法運動、転

向までの戦前の椎名を叙述する。第2章「闇と向き合う自由」は、キリスト教的回心以前の椎名の初期作品が、イエスの復活によって知られる「ほんとうの自由」を、死からの自由というかたちで予見的に表現していたとする。第3章「椎名麟三における回心の瞬間」は、無神論のままに洗礼を受けた椎名が受洗後約1年を経て復活のイエスと出会い「ほんとうの自由」に目覚めるその詳細な過程を分析する。第4章「キリスト教文学の誕生」は、椎名文学の特質である「ほんとうの自由」を光源とする「復活のリアリズム」を、その頂点である『美しい女』を通して分析する。第5章「罪と自由」は椎名の自伝小説を、第6章「死と終末のなかで」は椎名の後期作品を、第7章「自由論」は椎名の戯曲を、第8章「椎名麟三の文学と「ほんとうの自由」」は初期の代表作『永遠なる序章』を取り上げ、「復活のリアリズム」の諸相を描く。そして第9章「椎名麟三の文学から未来へ」では、椎名文学を「復活のリアリズム」の方法によって描かれた、日本における新たなキリスト教文学の誕生として位置づけ、それを滝沢克己の「インマヌエル」の文学的な表現であると結論づける。

第3部「内村鑑三—十字架・復活・再臨」は、これまで考察された2人においても鮮明であった十字架と復活に加え、内村において強調された再臨に加え、日本におけるコンバージョン経験のもたらした「宇宙論的な救済」の境位を描き出す。第1章「日本近代とキリスト教」、第2章「内村鑑三とキリスト教」、第3章「霊的回心と贖罪信仰」は、内村が札幌農学校における強い受洗から、アメリカにおける贖罪信仰の目覚めまでを描く。続く第4章「悲嘆と希望」、第5章「現世と高尚なる一生涯」、第6章「信仰と社会」、第7章「キリスト教と無教会信仰」は、十字架による贖罪信仰を得て日本に戻った内村が日本において経験する、様々な信仰的な試練の諸相を描き出す。数々の困難に出会いながら、その信仰を支えていたのが「復活」のキリストであったことを明らかにする。さらに本書は、内村において批判されることも多い「再臨信仰」に注目する。第8章「インマヌエルと福音」は、内村の信仰と再臨への注目を『ロマ書』講義をもとに明らかにする。第一次世界大戦やロシア革命という時代の激動、特にそのおびただしい死者を背景に、内村は「終末」を論じ始める。終末とはこの世の終わりではなく、宇宙の完成であり、それを告げるのがキリストの再臨である。第9章「復活と再臨」は、内村を再臨信仰へと導いたもう一つの契機である愛娘ルツ子の死を取り上げ、再臨を通して完成する宇宙の希望は、死者との再会に、失われた楽園のキリストによる回復にあるとされる。第10章「内村鑑三—私は一基督者である」は、以上の内村の信仰の生涯を「一基督者」という言葉に要約し、存在の宇宙の回復への希望にその信仰の核心を見出す。

結論では、以上の考察を踏まえて、キリスト教受容、その回心経験がもたらす社会への希望が論じられる。滝沢克己は徹頭徹尾、人間の存在宇宙のロゴスであるインマヌエルの原事実を究明する中で、キリスト教会の壁に突破する神の救いを指し示した。椎名麟三は、死からの自由を体現した復活のイエスを文学の光源とする復活のリアリズムにより、死と生との絶対的な壁を超える生を描いた。内村鑑三は、贖罪信仰を通じて、滝沢や椎名がみた復活の光を手にするとともに、世界大戦と愛娘の死を契機にさらにそれを越えた再臨の希望に至る。近代日本におけるキリスト教的回心が開いた救済の使信は、正統的な信仰に依りつつ、教会を超えた広がりをもって人々に伝えられた。

以上のように、本論文は、哲学、文学、神学に渡る膨大な文献資料をもとに、近代日本におけるキリスト教受容の一水脈を解明した。特に、戦中の滝沢の天皇制イデオロギーとインマヌエル神学との関係、椎名における回心体験、滝沢と椎名との関係についてはオリジナルな解明が認められる。また、内村論は、3.11後のおびただしい死者を前にいかに宗教は希望を語りうるのかという明確な問題意識から生まれており、キリスト教的救済の宇宙論的な広がりを示す意欲的な論考である。これらを総合的に判断し、博士（学術）の学位に値すると認める。